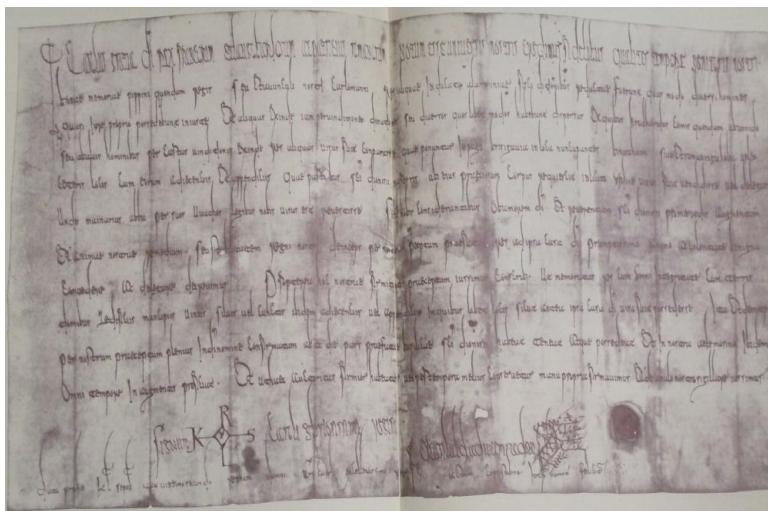
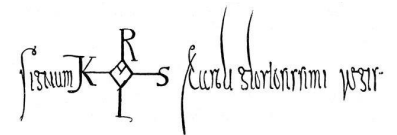




カール大帝のモノグラム

加納 修 (西洋史学)

カロリング朝のカール大帝 (在位 768 年～814 年) は証書に署名する際に、自筆で署名するのではなく、名前を構成する文字 (K, A, R, O, L, V, S) を組み合わせて作った記号を用いました。複数の文字を組み合わせて作った記号はモノグラムと呼ばれています。それ以前のメロヴィング朝 (481 年～751 年) の王たちは、たとえば「キルペリクス王が下署した」の文言で自筆で署名していましたが、カール大帝は「いとも栄誉ある王カロルスサイン」として付されたモノグラムを完成させるために最後に一筆入れる (菱形を構成する A の内部の y のような部分) 形へと署名のやり方を変えました。この変化は、ゲルマン人の王がラテン語の識字能力を身につけることができなくなってしまったからだとして、文字文化や教育制度の衰退を反映するとされてきました。



しかし、こうした見方は見直されつつあります。このモノグラムは全体として十字架の形を取っていて、王の権力がキリスト教に支えられていることを表しています。そしてカール大帝は、同じ形のモノグラムを貨幣 (デナリウス銀貨) にも刻ませています。したがって、カール大帝が証書の署名にモノグラムを用いるようになったとき、それは単に文字を書く能力を有さないという消極的な理由のみに帰すことはできません。カールはモノグラムを自らの権力のシンボルとして積極

的に用い、できるかぎり多くの人々の目に印象づけようとしたのです。

モノグラムは花押に似ていると指摘されることもありますが、相違も大きいように思われます。日欧の比較史の観点から、モノグラムと花押について、あるいは署名の仕方全般を研究するのも興味深いでしょう。(画像の出典 Chartae Latinae Antiquiores. Facsimile-Edition of the Latin Charters prior to the Ninth Century, edited by Albert Bruckner and Robert Marichal, Part XVI, Urs Graf Verlag, Dietikon-Zurich, 1986)

学生たちの研究生活—File38

「語られ方」に目を向ける

研究室名：日本文化学研究室

皆さんは「引揚げ」という言葉をご存知でしょうか？

1945 年の敗戦を契機に、日本はそれまで植民地支配を行ってきた土地を失うこととなりました。それぞれの地にはたくさんの「日本人」が住んでいたのですが、その大多数は本土へと移動することになります。この移動のことを一般的に引揚げと呼びます。

京都の舞鶴市には引揚記念館があり、引揚げにまつわる貴重な資料が展示されています。私も以前訪問したのですが、そこで気になる点があったのです。

それは資料の多くが敗戦当時成人していた人々の証言であり、様々な困難を乗り越えながら、いかに

して待ち焦がれた祖国へと辿り着いたのか、という記述ばかりが目立っていたことです。

しかし調べてみると、引揚者の中には生まれてすぐに旧植民地へ渡った子どもや、旧植民地で生まれ育った子ども達も含まれていました。そのような生い立ちの人々にとって引揚げとは、いわば「見知らぬ祖国」へ渡るといった経験でした。

これを契機に私は引揚者の中に存在した世代の問題に目を向け、これまで記念館や歴史の教科書などで語られてきた引揚げとは異なる引揚げ体験を明らかにしたいと考えるようになりました。

あることについて展示することは、文章を書くのと同様に一種の表現です。そこには必ず「このように見せたい」という意図が存在します。情報を受け取る私たちはそのことを意識し、そのような意図から外れた存在についても目を配らなければなりません。私の場合は、記念館でそのことに気づきました。皆さんも「何が」語られているのかではなく、「どのように」語られているかという視点を持つことで、新たな疑問や発見が生まれるかもしれませんよ。

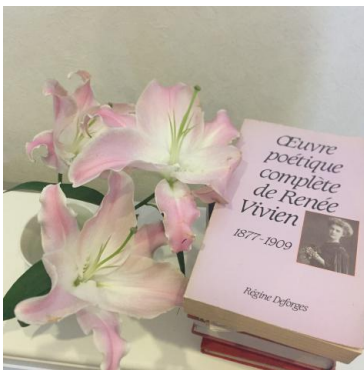


[広瀬 友則 (執筆時 博士前期課程 2年)]

学生たちの研究生活—File39

死せる生を読む—作家研究についての一考察

研究室名：フランス文学第2研究室



僕の専門はベル・エポックの女流詩人ルネ・ヴィヴィアンです。ベル・エポックとは世紀末から第一次世界大戦勃発までの期間のことで、ヨーロッパのみならず世界史的に見ても稀なほど戦争や紛争の少ない平和な時代でした。そんな時代には文学・芸術などの文化が栄える一方、麻薬、酒、フリーセックス、同性愛といった頹廢した流行が付きまとうのが世の常のようで、この点は平和ボケした現代日本にも通じるものがあると思います。特にベル・エポックの文化人は頹廢の担い手となることも多く、同性愛に耽り、大麻とアプサンで脳みそを蕩かす芸術家が後を絶ちませんでした。

ルネ・ヴィヴィアンもその一人で、その美貌に似合う流麗な詩を認め、生涯に渡り女性だけを愛し、阿片とアルコールの依存で32年という短すぎる生涯を閉じました。

僕が関心を持ったきっかけが彼女のそういった耽美的な生涯であったことは事実ですが、最近はそのような論調から彼女を救い出すことが至上命題だと思っています。その美貌と同性愛傾向が注目されるあまり、詩人としての評価がなおざりになっているように思えてならないからです。伝記的情報は作品解釈の傍証には有効ですがそれ自体では根拠にはなりません。そのため最近では作家と切り離れた分析を行い、純粹に作品を評価する目を養うことを重視しています。魅惑的な人生は評伝だけでなく、詩そのものに十分宿っているのです。彼女の見つめた死や欲望といった美しくも蒼ざめた(この修飾語は彼女の詩に頻出する)詩的世界を、言語を通じて僕も眺めたいと思っています。[長澤 法幸 (博士前期課程 1年)]

最近の文学部

冬来りなば...

名大グリーンベルトの紅葉もそろそろ終わり。すっかり寒くなりました。受験生の皆様、暖かくして追い込み頑張ってください！新年号は1月30日発行予定です。(YK 記)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)